山とスキー

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十三年九月三十日印刷納本
大正十三年十月一日發行（毎月一回一日發行）

第四十二號

札幌 山とスキーの會 發行

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第四十二號目次

記事

詩　ウイルヘルム・スタインコツプ　〔一〕
元旦の上の岳　山口季次郎　〔三〕
原人禮贊　冷二生　〔九〕
五月の奥山盆地（三）　藤江永次　〔一二〕
記念として　大島亮吉譯　〔一五〕
スキー材製作報告　加納一郎　〔一八〕
第三回エヴエレスト抄錄　松方三郎譯　〔二八〕

寫眞版

上の岳より黑部五郎を望む　山口季次郎
五月のヌタツプヤンペツ　藤江永次

大正十三年十月發行

暉きの光にみちし　その日なりしよ。

秋深き衣をまとひて森と野と山はありき。

われはみちあふるゝ、幸福と、熱き歡喜と

ほがらかの、さすらひ心につゝまれてありき。

自然美のさなかを歩めば

悅びの眸と、若々し心もて

しづかにも輕やけく
想出の幻境にぞ入る。

山を超え、高きを行けば
おのづから歡喜にえみぬ。
さなり思ふに、この日見しは
わが故鄉の奇しき地なるよ。

—ウイルヘルム・スタインコツプ—

上の岳より黒部五郎を望む

山口季次郎

元旦の上の嶽

山口季次郎

まへがき

大正十二年の暮、大阪朝日新聞の主催で「雪の日本アルプス踏破隊」といふ極めて嚴肅なる壯擧が發表されました。勸めによつて參加した同志は、榎谷徹藏氏富田碎花氏及私の三名、主催者側から社員が四名合計七名の一行が、年の瀨も迫る二十五日の夜大阪を出發いたしました。

翌朝富山へ着いて第一に恐縮したことは、旭の社旗を押し立てた多數のお出迎へと、活動寫眞の撮影とです、全くお祭り騷ぎのやうな中をやつと切拔けて、愈々出發となつたとき、その行列をみて再び驚かされました。

富山から參加せられた方が五名、人夫が十六名、總計二十八名の一隊、これに附隨する荷物が約二百貫、その上手に手に鐵砲やら鳶口などを携へて肅々と繰出したときの光景は實にはやトテモ簡單な形容詞では追付きません。

尙行くさき〳〵の行屆いた手當は申すに及ばず、三日路を踏込むだ眞川の小屋の設備調度に至つては全く以て想像の外です。

小屋は三階建五十坪の土藏構へ、名古屋の伊藤某氏が經營せられる所で、我々の一隊はそこへ招待された譯なのです。

米が三十俵炭が千貫、鶏五十羽鑵詰類の箱が五十個、爐には煙突があつて座敷には堀コタツ、湯殿があつて縁側は硝子の二重戸、到着の翌日がお餅つきで毎日の御馳走が、熊のカツレツに凍卵の茶碗むし。夜になると五十燭光のアセチリン燈が晝を欺く如く、その數個が眞川に越した對岸の枯木に點ぜられて夜の景色を硝子越しに眺めやうといふ趣向、恐らく太閤さまでもこの贅澤は御存じなからうと誰れかゞ云ひました。

山好き連の中でもプロ黨に屬する私にとつては一生の思出、トテモ死ぬまでに再度此の樣な山登りは出來ないでせう、全く畏い次第です、今でも思ひ出すと背に汗?が出るやうです。

偖て提灯はこれ位にしておいて、本文に入りますが、眞川入りの前後はあまり知れ過ぎた行程ですから省くことにして日程を稍々詳しく書いておきます。

日　程

大正十二年十二月二十五日大阪出發。
同二十六日——富山(神通川に沿ひて)笹津——茂住——上。
同二十七日——上(跡津川に沿ひて)大多和——峠——有峰。
同二十八日——有峰——小畑尾峠——眞川。
同二十九日、三十日、三十一日、眞川小屋滯在。
翌十三年元旦、——上ノ岳頂上を極む。
同二日——眞川——有峰——峠——大多和。
同三日——大多和——上——茂住——片掛。
同四日——片掛——笹津——富山(解散)。

眞川の小屋

七百年來傳說の秘史を、一朝の夢と化して離散し盡した有峰村の癈屋を運んで、東方二里の小畑尾峠を越した眞川の畔

流に臨んださゝやかな平地に建てられたのが、新粧せる眞川の小屋であります。

私達の到着したのが、富山を出てから三日目の二十八日、ひたすら雪の中を歩き通した前日來の疲勞で、到着と其のまゝ爐の傍にへたり込んでしまひました。

豫定によりますと、二十九日は休養、翌三十日の拂曉から登りかけて、上ノ岳若しくは藥師岳を踏破する筈のところを天候不良のため、心ならずも三十一日まで三日間、この小屋で閉ぢ籠ることになりました。

籠城中の出來事については詳しく申上げなくとも大抵お判りでせう、私達は明くる日も、明くる日も朝からの降雪で焦り出して居るにかゝはらず人夫達は反つて好都合といはぬばかりに、朝つぱらから濁りを煽つて大平樂を並べて居ります名物小原節の合唱は若い人夫達の踊りに伴つて勢ひを得てまゐりますと遂には私達も仲間入りをして騷ぎ出すといふ始末で、殆ど三日間は忘年會の連續といふ有樣でした。

殘りの風はそろ〳〵雲を動かし始めました、ところが大晦日の暮近い頃三日間降りしきつた雪は、はたとやんでどうやら晴れさうな雲行で、有難い！、天道人を殺さずたァよくいつてある、明日は元旦だ幸先がいゝや、とは詩人富田氏の言葉です。

天界にも曆があるんだらうかと思はれる位實際このときの嬉しさは忘れられません、私達は明日のため、除夜の宴席を打切つて早くから寢ることにしましたが、飽くことを知らぬ人夫達の咆叫はかなり遲く迄軒の氷柱を震はしておりました

太郎平から上ノ岳

「晴れだ〳〵、星が見える」といふ騷ぎ聲に目を覺ましたのが午前四時。

支度もそこ〳〵に、はや小屋の外に出かけてみると、空は名殘なく紺碧色に澄みきつて、星の影さへキラ〳〵と私達の道途を祝福するやう、嬉ばしげに瞬いて居ります。

前日來の忘年會が祟つてか、なか〳〵に出揃はぬ人夫達を待つてゐる間にも、ヒシ〳〵と寒さが身に浸み込んできます冷たい筈、F○、九度といふ寒さですもの、いよ〳〵出發です、先登はラッセルの人夫組が十人、次ぎが私達七名、寫眞班二名は列外、殿が人夫頭の平藏といふ順で歩き出したのは、實に大正十三年一月元旦午前六時でありました。

眞川の丸木橋を東に渡つてすぐ、太郎平最下の森林帶に取付きます、立山の仁王樣こいはれる六尺ゆたかの佐伯福松が先登に立つて、殆んど胸まであらうと思はれる積雪を、あたりかまはず跳ねこばし、見事なラッセルぶりをみせながらグン〳〵登つて行く有樣は實に壯觀です。

スキー隊のラッセルを標の人夫がやるのか？　など〻お笑ひになつては困ります。實際或る程度以上の深雪の場合には殆ど標もスキーも大した違ひの無い事があるのは誰でも經驗する事です。まして今度の樣な隊伍の場合小人數のスキーが大多數で馬力も數段上手の標にラッセルさせる方が遙に有効です。尤もこれは私達スキーのものから云つた話ですが。

一行は只默々と歩を進めました。未だよく周圍が見えなかつたんでしたが、約一時間の行程を了つた頃、東は次第に紅を呈して參りました、月の光は太陽の前では刻々薄れて行くばかりです。喬木の樹間を透して次第に遠望が鋭く樣になりました。フと見ると西の方には遙にその頭の紅に燃えて居る白山が見えました。モルゲンロートこでも云ふんでせう。その景色は實際冬の山の朝を知らないでは想像すら許されますまい。かく云ふ私も今初手の事です。思はず一行の沈默は破れました。此の壯觀を前にして歡呼を擧げない人間は色盲位なものでせう。然しその美觀も吾等の一歩〳〵と同じリズムで變化して行きます。やがて白山の峰はその名の通り白さになり終りました。又もとの沈默に歸つて一行はひたすら登りに登りました。

密林地帶を脱して、所謂太郎兵衞平に出たのは八時を僅に過ぎた頃です。下界が見えます。全く名の通り下界です。富山平野、それから北に延々として能登半島がわだかまつております。今頃は下界の人間は屠蘇の氣嫌で、紋付でも着込んで年始のお禮に出掛ける時分なんでせう。一向お目出度くも無い境遇に居乍ら、私達もやはり下界に居たら、人毎に頭を下げてお目出度うを繰返さねばならんのかと思うと何だか、下界の人が氣毒になつて來ました。然し、まだ朝の光は私達に惠まれては居りません、然しそれも束の間でした、上ノ岳を射て居た日の光は間も無く私達の一行にも餘光を惠みました。元旦の太陽、別に常日と變つた光源である譯はありませんが、場所と云ひ、時と云ひ、眞實に何だか私には生れて初て受ける太陽の恩惠の樣な氣がしたのも無理はありますまい。

午前十一時、上ノ岳の北のザッテルに新設せられた伊藤氏の小屋に到着しました。その頑丈さや、設備等、今更、繰返へす迄もありますまい。クリスマスケーキの樣に氷衣につゝまれた小屋に押入つて晝食をとりました。

西面の荒く削られた黒岳は小屋の正面に男性的な姿を見せて居ります、右方遙に槍、穂高、更に遠く乗鞍さえ見えます

寫眞を撮るもの、滑るもの、一時間半は天上の樂園を思ふ存分に享樂しました。午後の零時半、平藏の「天氣が變るから」と云ふ聲に氣がつけば、藥師の嶺は早や白雪が卷き上つて居ます。直ぐに身仕度をして太郎平兵衞平を眞直に眞川の小屋へと滑り出しました。吹雪は私達を追ふ如くによせて來るらしいのです。太郎兵衞の頭から一里有餘の平、音もなく滑り續ける愉快さつたらありません、數町先に一列になつて行く先發の數名の人夫の間を千鳥に縫つて見事なアルペンクルフエを畫き乍ら、瞬く中に標の一行を離れました。私が見事なアルペンクルフエを畫くからつて笑つちやいけません。實際見事なボーゲンでした。畫くと云ふより自然に畫けるんです。北海道のN君から、よくプルフエルシネーの事を吹かれました。全く此れがプルフエルシネーなんでせう。硼酸の樣なクリスタルの雪、此れもよくN君にあてられた奴ですが全くその通りです。

平の中程迄滑り續けて振り返つて見ると、ザツテルの小屋の邊は既に吹雪いて居ました。無二無三に滑降する中にも、吹雪は刻々と押して來ます。再び針葉樹木に入つて、ホツと一息ついた時には全身眞白に吹きつけられて居りました。

三時半に再び山の殿堂眞川の小屋でスキーを脱ぎました。今日の意外な成功に皆は聲高く万歳を叫びました。

夕方に近く、再び空は晴れ渡りました。上ノ岳の山々は眞紅に燃えながら小つぽけな人間共を威脅するかの如くにそびえて見えました。

里への途

一月二日、午前七時、眞川の小屋を發しました。矢張り人夫にラツセルさせ乍ら八時半には小畑尾峠を登りつめました正午には再び神祕の鄕有峯に着、數日ぶりで家の並んで居るのを見た時には嬉しい氣持といやな氣持とが一緒になつて頭の中でグルグルつと一廻りやつた樣な氣でした。中食を了つて午後一時更に里へと向ひました。粉雪の次第に降る中を四時半峠の頂上へ出ました。三の谷二の谷を過ぎる頃次第に薄暮が四圍をつゝみ初めました。一の谷では終にラテルネを用ひて雪の野路を進みました。

危險な行程も無事に八時、一行は疲れ切つた體を大多和の村落に運び得ました。

明る三日は早朝出發の豫定でしたが、昨日の强行の疲勞は九時の出發を豫儀なくさせました。大多和より跡津川に沿つて二里の山路を左古へ降りました。十時に左古を、十一時に跡津を經て、正午に上に到着、晝食後、一時半、荷物を馬橇に託して、高原川に沿つて下りました。積雪は流石に次第に少くなり、久方振りで例のクリームの樣なベト〳〵した雪の中を歩みました。

午後の五時、片掛に着、一泊。

四日の七時半、片掛を發しました。高原川の流れの美しさは私達の此行の最後の收穫だつたと思ひます。次第に人家の多くなる中では、小供達が橇を戯んで居るのが目を曳きました。

兎に角、十時半、笹津に着、再び石炭の煙で動く汽車なる乘物を見ました。

× × × × ×

下らない記事で紙面を浪費した事を恥ぢます。然し、何と云つても、此度の行は終生忘れ得ないものだつたと思ひます雪に埋れた有峯の廢墟、物質文明を山の眞中に迄も運び込んだあの眞川の小屋、カトリックの殿堂の巨柱の樣な針葉樹の森、そのインヂゴーのアーチの間からのぞかれるコバルトの大空、無限の力で峯に吹き上る雪、そして、思無邪と云つた樣な太郎兵衞平の大滑走、數え上げれば限がありますまい。然し乍ら此んな過去を追ふ繰事は何の興味もない事でせう。唯山を旅する者を除いて。(終り)

原人禮讃

冷生

二

今は京大の教授であるところのNさんを中心にして私共はかつて、こんな事を話し合つたことがありました。それは森のとに就て話してゐるときでした。「われわれも、昔しはそう云ふ原生林の中を、鼻をうごめかしながら、歩るいてゐたのでせうね。そうして、澤の彼方や、樹の蔭に居て、姿の見えない異性を、たゞ嗅覺で捜し求め歩るいたんでせうね。繁り合つた樹の間を、原始的な姿で歩るいてゐるところなど想像すると、今われ〳〵の持つてゐる鼻が如何に鈍感だかゞ解ると同時に、人間の眞んこうのところがうかゞはれる樣です」と。

山へ行くとよく森林帶で迷ふことがありますが、何と云つても山岳林では地形が顯著ですから大抵は見當がつきます。だゝつ廣い平原林になると、方位が全く解らなくなります石狩平原の眞中にある野幌の原始林は、今は針濶葉樹の原生林として天然記念物になつてゐるさうですが、その森などは南北に稍々細長く、つゞいてゐるので、之を東西に横斷しようと思つて、這入りながら、又元の側へ出て來たと云ふ樣な話があります。實に方位認識力の薄弱なことをわれわれは痛切に感じます。山へ行くには磁石を持つて行けと登山準備の注意にはいつも書かれる事であります。進んだのか衰へたのか、いづれが眞か解りませんが、とも角なさけない事であります。

しかしまたそうしたどこまで行つても同じ樣な森の中を迷ひあきて、一寸心を落ちつけて、しみじみと考へて見るときに、此の森に住み、食を求め、仲間をさがし會つたりしてゐた事を思ふと、どこかにハイムウエーの樣な、ゆかしくも根强い衝動を覺えることもあります。

方位認識力とは違ひますが、廣い雪原をスキーで行くときでも、決して眞直には歩けないものであります私はよく直線的に設けられたポプラの並木道にそふて努めて歩いて見ましたが、こうした規準がそばにあつても、ふりかえるシュプールは決して直線にはなりませんでした。それは或はスキーのくせではないかと疑

ふ人もありませうが、どんなスキーをはいても相でありますし、また誰でも自分のシュプールを氣にする人はよく此の事實を肯定せられる事と思ひます。此はあのランニングの一〇〇米の競走を見ましても、あの一定のコースの中でも左へよつたり右によつたりすることは免れ難い樣に見受けられます。たつた一〇〇米だけでも眞すぐには歩けないと云ふのが人間でせうか。

ブラジルの廣漠たるコーヒー園に日本の人達が移住しました。彼等はやはり生れた土地の風習から完全にのがれることが出來なかつたのでせう彼等は他の諸國から移住して來た人々や、また土地の人々と共に生活したのでありますが、それからの人々は、日本人の一群に對して次の樣に抗議した相です。「今度日本から來た連中はとても臭いものを建てやがつた。あんなものは、はやくこわしてしまふがいゝ」と。日本人等は便所を建てたのださうです。

北海道の中央高地には今度二つの登山小屋が出來たのでありますが、やはり今となつては此と同じ樣な變なことになり相であります。

森林帶を超えた所に建てられた此等の小屋は夏日登山者絶のえぬまゝに、殘し棄てられる食物も尠からずと云ふ有樣であります。

今はもう潑剌として澤の澤まで、湧水を尋ねて溯る鱒の數も尠くなつて、轉石をごろごろをこしては、その下に赤い顏と長い鼻をつき出してゐるザリガニをあさつたり、古木にからむヤマブドウや、コクアの蔓を引きむしつたりして漸う命をつないでゐた、その界隈の熊公達は、洵に此は適當な文化施設と思つた事でせう。よくその小屋の圍りに出沒すると云ふ案配になつたらしいのであります。彼等はさぞかしアメリカの牛を食つたことでせう。北海のサンマに舌づゝみ打つた事でありませうけれども困つたのは人間樣であります。折角千何百圓かかけて小屋を立て、大いに登山趣味を普及せんものと考へた人々は此の現象にいさゝか當惑の樣子であります。やたらにアルプス氣取りで山には小屋がなければならぬかの樣に思ひ込んだのが、とんでもない、人よりは熊の爲になろふとは夢にも思はなかつた事でせう。

生れつき非凡な面白い話題を作る性質を持つてゐるHさんが、そこの小屋で熊の爲に三時間も閉ぢこめられたと云ふことです。戸を閉め切つて、息をこらしてゐる間に小屋の外では無邪氣な先生は飯盆の中に殘つた味噌をさもうまさうになめてゐた

と云ひます。熊が自由な天地に居て人間がせまい小屋に居ると云ふのも原始の山の中だからこそでせう。幾分、人は自らの墓穴を堀つた形ではありませんか。

やれ靴下を三枚穿けの、シュラーフザックは馴鹿がよいのと、むつかしい事になりますが、晝の間歩いたそのまゝの衣裝で、ごろりと雪の中に寢ると云はれるアイヌの話を思ひ合すと、やたらに大きなルユックザックをかついで得意がるのも妙なものではないでせうか。生命を危害から保全する爲の物質的な考慮と工夫を高度にする前に、一應その危害に近づき面して見るのも一法かと考へられます。此の事は消極か、積極かの二面を示すものであつて、すべての事に問題となることでせうが、アウスリユストウングに就て頭をなやますとき、一度は此の根本問題に觸れて見てもいゝかと思はれます。

遊蕩的登山の形式に拘泥して、あまりに「文化人」たることに執着することをやめて、われわれはもつと東洋的な精神を甦らせて、山に對し山を味ひ、そうして山に住み、その体驗のうちにより深く原人の姿を浮彫にしたいものであります。

先づ一個の磁石からでも近づかうではありませんか。

五月の奥山盆地〔三〕

藤江永次

もう少し書く筈だつたが餘り長々しくなるので終りにゾンメルシーの滑降に就て少しく書き後は後日に殘し一先筆を擱くことにする。

題と内容とが相應しくなかつたことはくれ〳〵も讀者諸兄に御詫する次第です。

この旅の終りには、三日間は雨と雪とに閉ぢ込められ、後三日間は氷雪の峯を吹雪と飢とに戰ひながら彷ひ歩き尚幸なることを得た。

その間に美しいアルピニストの友情、深刻な體驗、内面的收穫、その外新しい經驗智識など得る處が多かつた。もう六月に手のとゞく頃に一晩に一尺以上も新雪のあつたこともあつた。スキーには樹氷の如く氷雪が付き、ビンドンウイングは凍つて用をなさず、全く嚴寒そのまゝの狀態のこともあつた。吹けば飛ぶやうな粉雪の上をゾンメルシーで滑り拔いた皮肉な事もあつた。まざ〳〵と目に殘る當時の經驗は私の心に反響してまだ凄慘なしかも壯嚴なひびきを殘してゐる。

この行を共にした人々は左の五名で、人夫は高橋淺市一人であつた。

佐々木政吉、伊藤秀五郎、田中二郎、小森五作、

五月のヌタップヤンペツ

藤江　永次

ゾンメルシーの滑走に就て

ゾンメルシー及びその登行に就ては山とスキーの三十九號に於て述べた如くであるが、今又その滑走に就て少しく書いて見たいと思ふ。

先づ直滑降に就て見るに、その形體が冬期使用するスキーに比し甚だ短いがために、その安定度に於ては遙に劣るのである。例へば雪面に出來た凹所に對してゞも、長いスキーではそれが殆んどショックを感じない程度のものであつても、短いスキーにはそれを可成感ずるのである。それは丁度小船が波に搖れ易く大船は比較的それに耐へるような關係にあるのではないかと思ふ。殊にゾンメルシーを用ふる時期は一續きの斜面へ積つた雪のうちでも變調な部分が多い。例へば氷の如く固くなつた部分もあるかと思へば、又著しく融雪した甚だしく軟い部分などがあり、又風の強い所では雪面は波狀をなしてゐる。一體に四月の中旬頃から陽光が強くなるに隨ひ、可也傾斜の急な所では融雪による水の一部分が雪中に浸み込まずに表層を低部へ向つて、殆ど規則正しい間隔を置いて流れるために、美し縞狀の凸凹をなすのである。

故にゾンメルシーそれ自身の不安定なることと、かうした雪の狀態では、比較的急傾斜の直滑降には徒に足首の疲勞を增すばかりで却て不適當であるやうに思はれる。然しながら滑度の惡い融雪に於ては十五、六度内外までの直滑降にては甚だ安定なしかも樂な姿勢を保つ事が出來る。

之に反しスキーが短いだけに、ステムボーゲン、スイング、LST、などの動作の容易なることは言ふまでもない。殊にクリスチヤニヤスラロームの應用の範圍は甚だ廣く、クリスチヤニヤではそのカーブが小さく時間的にも經濟であり僅にスイングすれば容易に曲るのである。それ故尾根を下る時、狹い谷を下る時、又森林帶や灌木の多い地點の通過には甚だ有効である。その動作の容易なることは滑降に當つて、殆どステムボーゲンを使はぬことによりても、うかゞはれる、又長いスキーではどちらかへ曲るクリスチヤニヤの不得手な人がゾンメルシーをつけては美しいスラロームをかいたりなどした例もある。

クリスチヤニヤはステムクリスチヤニヤもオープンクリスチニヤもどちらでも自由である。その他ステムボーゲンは論ずるまでもない、

L、S、Tは雪も淺く、スキーも輕い故リフトするこゝが樂であつて、又甚だ有効である。

テレマークは、前足に體重をかけてやる所謂テレマークでは、スキーの交叉を來し却て體を倒すことが多い。併しフロツテルテレマークなれば比較的安定である、それ故ゾンメルシーには餘り適當な技術ではないと思ふ。

ヂヤンピングターンは始は廻轉し過る傾向があるが、なれゝば又一興にはなるが、實際山地に於て、ゾンメルシーをつけてゐる場合殆ど使用の餘地がない。

以上ゾンメルシーに就て簡單に書いて見たが一寸斷つて措きたいのは、ゾンメルシーにはスキー滑走による享樂的分子を多く期待することは出來ないことである。若し滑走による享樂が得たいなら、五月でも六月でも、汗水たらして長いスキーを山の上まで荷ぎ上げるこゝに越したことはない。スキー滑走を求める時私達もその汗水たらす努力を決して惜みはしない、しかし山を求め歩く時それは慮らく比較的無用の長物だと思ふ。往々アルペンスキーイングと滑ること自身を大部分の分子としてゐる所謂スキーイングとを混合して考へてゐる人もあるやうに思へる。同じ雪の山を求めるにしても山自身を求めると、平地より高い所を求めるのとでベルグシュタイガーとシーロイファーとの境が出來て來る。

しかしゾンメルシーにも滑走喜といふものがないのではない。寧ろ滑走の喜は副産物で、そのなかには享樂的といつた分子がないだけである。一日中魂が血で染るやうな努力をして、その間に僅に滑走し得る時があつたとしたら、それは魂の努力、肉體の疲勞に對する慰安であり、且つ尊い崇高な喜悅でなければならない。

私のさゝやかな經驗から考へて見ますに日本では四、五月の登山にゾンメルシーを使用することは敢て不利ではないやうに思れます。私はゾンメルシーをお勸めするわけでもありませんがこの記事が諸兄の何かの參考にまでなれば私の滿足は此上もありません。(九・十九)

記念として (IN MEMORIAM)

大島亮吉 譯

私等ふたりがはじめてこの峰の頂の岩の上に立つたものである。私等は手づからその頂の岩を積み重ねてそこに積石をつくつた。そしてその傍らに腰を下して長い間悦ばしい沈默と新らしい地平線の觀想と、そして秘やかな勝利の喜悦とを享けいれた。けれど私はこれからのちに尙ほもこの頂の上に來るであらうすべての人々にまで私等のいま享け得たよりより以上の多くの悦びが與へらるゝことを望んでやまない。なぜならば私は全くたゞ何等の目的もなく山へゆくやくざなひとりの登山者であり、かてゝ加へてまた私はたゞ一個の極めて不熟心な山岳會員にすぎないから。

エミール・ジャベル(ある登山者の回想)

彼等はトウール・ノアールの頂の積石に倚りかゝつて座してゐた。彼等はふたりであつた。そのひとりは壯年のもので、他のひとりはまだ年若い青年であつた。

彼等はたゞ默してそこに座してゐる。

萬象は沈默してゐる。

峰の頂が默してゐる。

氷河の帶綠色が默してゐる。

はるか下の山裾の牧場の綠金色も默してゐる。

遠い谷の流れも默してゐる。

頂に於ける最初の一時間が經つた。彼等はなほもたゞ默してゐる。彼等はおの〳〵たゞ心

のうちで、思ひ〳〵にこの山頂に最初に登つたものゝ味ひ得る愉しさを味つてゐる。それは深い、そして親はしい悦びである。

すべてのものが穩かに、そして深く沈默してゐる。

クーロアールの不安定にかゝつてゐる雪さへもが默してゐる。

蒼穹も穩かな青色をもつて圓天井を蔽ひ張つてゐる。

次なる一時間が經つた。彼等は尙も默してゐる。太陽はすでに西へと傾いてゐつた。次第に西の地平線は日沒の耀かな彩りに染められゝことであらう。そして反對の、そこから夜の這ひあがつてくる東の地平線は次第に深く蒼ずんでゆくことだらう。そのいまだ地平線の向ふ側にゐる暗い夜が、すでにこの頂より彼等をば餘儀なく去らしめるのである。いまや彼等が、谷へとくだりゆく時とはなつた。壯者は無言のまゝ青年を促しつゝ立ち上つてくだるべく用意した。

それにしても、いかに靜かな、そして穩かな頂の二時間であつたらう。まことに彼等はひと言葉もお互ひに話し交すことはなかつた。壯者は恰も彼れたゞひとりがそこにあるかのごとくに振舞つてゐた。沈默が終始そこにつゞいてゐたのである。

そしてなほもまた彼等は靜かに默したまゝ、その頂を谷へと降りてゆく。夏のうす青い夕べはいともの靜かに谷よりのぼりくる……峯は黃金にかゞやいて安らかに憩ふ……

そして、夜……。

Charles Gos.

Très des Neves et des Glaciers.

このさゝやかなる一譯章は、現在瑞西にて登山家として、また山岳文學者として聲名を得つゝありまするシャルル、ゴオが、その最初の著作である「萬年雪と氷河のほとり」（一九一二年初版）の冠章に、嘗ては彼れをば親しく山々に連れ伴ひて、いろ〳〵と彼れを敎へ啓いて與れた、かのエミール・ジャベルのことを追想して、その記念のためにジャベルに對して公獻すべく書きましたものであります。そしてその著作の題寄にをきまして、またゴオはそれを「あのごとく熱情的に、而もまた穩かに山々を愛し、且私にまで高き岩と雪と、そして谷の落葉松と流れとの詩感を敎へてくれたところの、わが先輩であり指導者でありし、エミール・ジャベルに……私をしてこの山のみよりの得たるさゝやかなる一書を題寄せしめよ」とも書いてをりますほど、ゴオは深くジャベルの啓發を受けてをるのであります。

「記念として」のなかに叙せられましたことがらは、彼等ジャベルとゴオとの二人が、一八九七年の夏、最初にモンブラン山群の一峰たるトウール・ノアールの山頂をのぼりきはめたときのことをゴオが回顧して書いたもので、その文のなかの壯者とは言ふまでもなくエミール・ジャベルのことを指し、年若き青年とはまさに當時の若きゴオ自身のことを指したものであるこ

とはこゝに書くまでもないことであります。

佛蘭西の生んだ數少い登山者のなかで最も今日名の知られてゐるのはエミール・ジャベルであらうと思はれます。彼れは確かに、ゴォが拔萃してその「記念として」の先に掲げた一文よりしても、また彼れの死後上梓されたその遺著「ある登山者の回想」(Souvenirs dun alpiniste.)のなかの行文よりしても、更にまた「記念として」のなかに於てゴォ自らによつて描かれました彼れがその登山に於ける態度よりみても、充分にその風格の一端を髣髴することが出來まするやうに、彼れはいかにも穩和な、そしてコンタンプラチイーフな態度を豊富に有つた登山家でありました。彼れの友にして、その遺著の編纂にたづさはれる佛國翰林院會員アンリイ・ボルドゥの序文に依りますと、ジャベルは生來病弱の方で、体質また蒲柳、隱棲瞑想の生活を好んで、社交よりは寧ろ書齋に、讀書よりは寧ろ思索にその日常を送つてゐたが、しかし彼れの山に對する熱情的な愛はその病弱なるにも拘はらず、彼れをして時ある毎にサヴォアの山々へ、ローンの水上の氷河のなかへと赴かしめたと言ふことであります今日彼れより親しく薫陶され、啓發されたことのあるゴォ自身がまた極めて觀想的(コンタンプラチイーフ)な登山の態度を持してゐるのは決して偶然ではないのであります。彼れのこのやうな態度はなほそのゝちの多くの山に登る人々の心に深く影響したやうにみえますいまこゝに、私がごくわづかにその著書を通じてのおぼろなる彼れの姿を想ふて、いさゝか彼れについての片鱗を拙ない文字をもつて移し植ゑるべく筆を執つたのも、たゞに彼れに對するはるかなる敬慕の一端よりいでたるに過ぎないのであります。山が私等に與へてくれるいろ〳〵のものに對して、自らそれを感得することの力のいまだないものは、たゞ時としてこれまで山にのぼつた古今の人たちの山についての書などを開いて、それらを通じて多少なりとも山々の豊かに私等に與へてくれようとするものをば享けいるゝことをなすことが出來ませう。山についての想ひ秘められたるそれらの人々の深い想ひのきれ〳〵が、時たま紙上の文字を通じてわづかに私の貧しい心胸にも沁むのであります。然し乍らそれらのものゝひとつを今このやうに再び私が紙上に形をかへて現してみましたる時に於ては、其等の言葉は勿論その本然のうるはしい色調もまたおのづからなる力强さをも何時しか失つて、たゞそこには何等の光華なき弱々しい文章のみが殘されてゐるのでありませう。私等山に對してはごく幼き歩みにあるものなりとも、なほ山々が私等に與へてくれる多くのものゝそのごとく一少部分なりとも享けいるゝに足るだけの素地をば私等後に來りしものゝ心のなかに拓いてくれたその恩惠のすべては、これら古今の先蹤者たりしすべての人々に歸さねばならないものゝごとくに思はれるのであります。そして特に其等先蹤者の多くが、その後進者に對しては山に登る者の常として多少倨傲とても或ひは言ひつべき嫌ひのある態度を持してゐると言はれてをりまするに對し、このエミール・ジャベルや或ひはかのウインスロープ・ヤングのごとき穩かな、そして寛(ひろや)かな心を以て私等に對してくれる人々に就ては一層その恩惠は深いものであらうと思はれるのであります。

スキー材製作報告

加納一郎

一、スキーの製作

優良なるスキーの生産されん事は吾人の久しく望み來れる所なるも、未だ本邦製品中に於て全く信頼するに足るべきものを得ず、僅に高價なる輸入品を求めて滿足せざるべからざる現狀にあり。

スキーの進歩發達に伴ふべきスキー製造工業が創始後十數年を經過せる今日に於て尙、かくの如き有樣なるの理由は、多々あるべしと雖も、凡そ次の二點を主なるものとなすべし。

一、スキー製作者が實際スキー技術に通ぜざること。從つて製品の善惡がスキー家に如何の影響を與ふかを考慮せず、或は尠くも單なる模倣製作に汲々として、特に本邦產原料より適當なるものを研究撰擇し又は、その樣式に新しき創意を用ふる等のことをなさず。

二、之に反し一般にスキーの價格なるものが、高價なるものと世間が誤信せるに乘じて、低廉なる原價にもかゝはらず、市價を引下げず、多大の利得を收めつゝあり。之が爲にスキー製作又は販賣業者は年と共に增加し、競ふて粗製品を販賣し、濫造を此れ事とす。

叙上の如くにしてスキー製造業者は、優良なる若き少年スキー家をして、その粗製品の爲に大なる困苦と悲觀とに陷れ、天才的スキー家をさへ、その才を自覺するの機會を失せしむるが如き、幣害を流し來れり。

かくの如き惡幣は獨りスキーの生産のみならず、と雖も時に山地にありては生命の危險さへ惹起し得べきスキーの製作に當り、かくの如き不誠意の存するは實に遺憾にたへざる所なり。

吾人は今日概に二三のスキー製造業者に對し、その創業に當りては勿論、年々その生産品につき、スキー家の立場よりして出來得る限りの忠告を與へ來りたるも、その改善、努力を要するの點、二三にして止まらず、特にその材部の製作に就ては、甚だ不滿とする所たりき。

此處に機會を得てスキー材直轄製作を行はんとし、一九二三年春より準備に着手し同年末その製作を行ひ、今や此が實際的成蹟を見得るの時期に達せり。後日の參考に資せんが爲、此が製作の過程につきその大要を報告せんとす。

二、材種の撰擇

一般にスキー木部に用ひらるゝ材種はアッシュ、ヒッコリー、バーチの三者を主なるものとし、中歐に於ては前二者多く、北歐に於てはバーチを主とし、北米に於ては、此の三者の外、松材を以て安價なるものを製産しつゝあり。而して、上の三樹種は、各同屬のもの本邦に産すると雖も單に植物分類學上同屬なるの故を以て直ちにスキー用材として、同一の値價を有するものと斷ずべからず、アッシュ材の如きスキー木部のみならず、バット其他の運動用器具原料として甚だ適當なるものなるが、本邦製運動用具中アッシュ材なりと稱せるものはアチダモ又はヤチダモ等にして、眞の中歐産アッシュ材には非ず。然るを以て外見上稍相似たる點ありとは雖もその木材工藝的性質に於ては、しかく優良なるものに非ず。ヒッコリーの如き、北海道に於ては銃床用材として貴重なるオニクルミ（Juglans Sieboldiana. Maximowicz）を産すと雖も歐洲又は米國産同種とその材質を異にす。バーチ又然り。

かゝる狀況なるを以て歐米生産品と同一名稱の本邦材を取つて以て直ちに可なりとなすことを得ず。顧みて本邦スキー木部用に供せられたる樹種を擧げんか、信越地方に於ては早くよりケヤキ（Zelkova serrata Makins.）材を用ひ、今日に於ても尙本種を主とす。ケヤキはスキー用材としてしかく適當なるものに非ざることは既に實際的には勿論、學理的にも明かにせられたる所なるにもかゝはらず、イタヤカヘデの如き適材を多量に有する北海道にまで年々製品として移入さるるが如きは誤れるの甚しきものなり。ケヤキの他、エゾヤマザクラ（Prunus serrulata Lindl. var sachalinensis）及びウダイカンバ（Betula Maximowiciziana Regel.）等北海道スキー製作の初期に見たる所なるが、近年に於ては、主としてイタヤカヘデを用ひ、一九二二—二

三年シーズンにはアオタモ、(Fraxinus longicuspis. Sieb. et Zucc.) アカダモ (Ulmus Japonica. Sergent) 材を用ひたるもの尠からず。本シーズンに於ては、シホジ (Fraxinus Sieboldiana. Bulme.) 材を用ひたるもの多量に生産せられたるもの丶如し。

かくの如くにして本邦スキー製造業者も幾分、本邦産材より適材を見出さんとして種々撰擇せることありしと雖も要するに材の適否よりもその原料個々の撰擇仕入に就て萬全を期すること能はざる經濟的事情並びに木材市場の關係に累せられ、未だ一定せず。年々異れる材種の製品を見るの狀況にあり。されど右のうちイタヤカヘデのみは數年來、多少の欠點非難を認められつ丶尚主要數量をなしつ丶あるは、その實際的價値に於て既出他材に優るものあるが爲なるべし。

スキー用材の研究に就ては林學士平井左門君の試みたるものあり。(スキー用材の必要性質及びその屈撓强試驗、本誌第二年自一九八頁至一〇八頁スキー用材と積雪との關係に就きて、同自一二二頁至一二九頁)此が目的は本邦材種中スキー用材に適當なる樹種を實驗的に比較せんとせるものにして、供試料一〇種(内一種はアメリカ産)につき抗撓强試驗並びに摩擦、比重の關係を檢し、尚同一資材よりスキー木部を製作し、スキー技術上、之が差異を比較せり。その結果に於ては明かに之を確定する事を得ざりしと雖も、略適否を分別し得たるもの丶如く、從來の印象的批評に反し、學術的根據を提供してスキー製造業者及び注意深くスキー撰擇をなすスキー家に對し多大の參考とを與へたり。

然りと雖も此が實驗中、供試スキーの使用期間充分ならず、又製作個數少かりしため、論者一人の短時日の實感のみにより斷ぜられたるを以て、その與へらるゝ所の結論に於ては多少、考慮の余地な存するもの丶如く思料せらる。

三、木材の性質

凡そ木材の性質は樹種の異るに從つて相違するものなりと雖も、個々のスキー用材につきてその性質を論ぜんとするに當りては尚更に詳細に同一樹種中に於ける相異をも檢せざるべからず。即ち同一樹種にありても、立地の關係、樹齡並びに樹木の部分につきて相異あり。又伐採の時期及び伐採後の乾燥如何により異る。

立地の關係とは林木生育の場所に於ける各種の事情、例へば産地の氣候、地味、傾斜方向並びに成林の關係等なり。即ち同一樹種と雖も氣候適順なる鄕土に於て生育せるものと北又は南の生育限界附近に生ぜるものとはその生長の狀況を異にし西又は南の傾斜面に生ぜるものは然らざるものに比して日光の受光量大なるの關係よりして比重大なる成

長良好の材を得べく、同一立地に於ても、森林の鬱閉度小なるとき同化作用旺盛となるの關係上又比重を増大し、地味肥沃なるに於ては均一なる成長を遂げ緻密なる材質を得るに到る。又林木の年齢に就て見るも、年輪小なるものは重く年輪大なると共に比重増加し、壯齢期に於て最大老齢となるに及び再び減少するを常とす。樹木部の部分につきては先づ邊材と心材とにより種々の相異點あり。邊材は心材より比重輕く彈性に富み、硬度小なるも、心材は強堅にして水分吸收すること小なれども彈性に乏し。技條材は幹材より狂ひ多く幹材に於ても心材は邊材より大なり。又同一樹幹と雖も更に嚴密に之を見るに於ては東面部は西面部より稍重き關係にあり。

又林木伐採の時期は材の狂に至大の關係を有するものにして、冬山造材にするものは狂ひ尠く、之に反し夏季伐採せるものは大なり。此れ伐採後乾燥期を經過するか否かによるものなるべく、材の乾燥時日と方法とも亦大いに材質に關係を及すものにして、伐採後時日を經ざるものの狂い易きは云ふまでもなく、伐採後山元土場に長期放置するときは材質を損し、又淡水中に貯藏せるのちの氣乾材（Lufttrocken holz）は狂ひを生ずること尠き等、此種木材の物理性質の關係は多くの素因により影響せらるるものなり。

さればスキー用材に適する樹種の選定を合理的に行はんが爲には、一樹種につき數個の供試料を取り、少くも一シーズン以上之が實績を觀察するの要あり。されど之を以て同時に數樹種の比較研究をなさん事は甚だ困難なり。今回の研究的製作の目的は一樹種に於ける叙上の關係を調査し之等がスキー用材として如何の程度に關繫を有するやを知らんとするものにして、兼ねてスキー用材製作上の諸點を考究せんとするに在り。

今回生産せられたるスキー木部はその原木生育の揚所、年齢伐採時期等判明せるものにして、かくの如きは該スキー使用者にとりて甚だ興味ある資料たるべしと信ず。

四、樹種並びに立地の關係

製作に用ひたる樹種は北海道産イタヤカヘデ（Acer Pictum Thumberg.）なり。本樹種は既に數年來北海道に於てスキー用材として使用され來れるものにして、其間多少の欠點を認められたるも概して適材なりとせられたるものなり。然して一九二一―一九二二年シーズンに於ける平井林學士の前記實驗に於ても相當の良成績を擧げ、唯その欠點として考慮を要するは、狂ひの多きこと、重さ大なるの二點なり。此の實驗に當り注目せる所は前記二點がスキー用材としてのイタヤカヘデに免るべからざる欠點なるか、或は從來原料として用ひられたるものが特に不備なりしに非ざるかに在り。

原料木の生育地は北見國常呂郡置戸村字シイトコロ國有林置戸事業區第三十五林班及び第六十七林班にして、立地の狀況は大体東北及び東南傾斜面にして、砂質壤土上に粘土四寸内外を有する地味中庸の地なり。而して森林は鬱閉密なる原生林にして、針葉樹を主林木とす。混淆濶葉樹種はイタヤカヘデの他、シナノキ、ヤマモミヂ、ヤマサクラ、ナラ、ハンノキ、セン、ヤチダモ、サイハダカンバ等とす

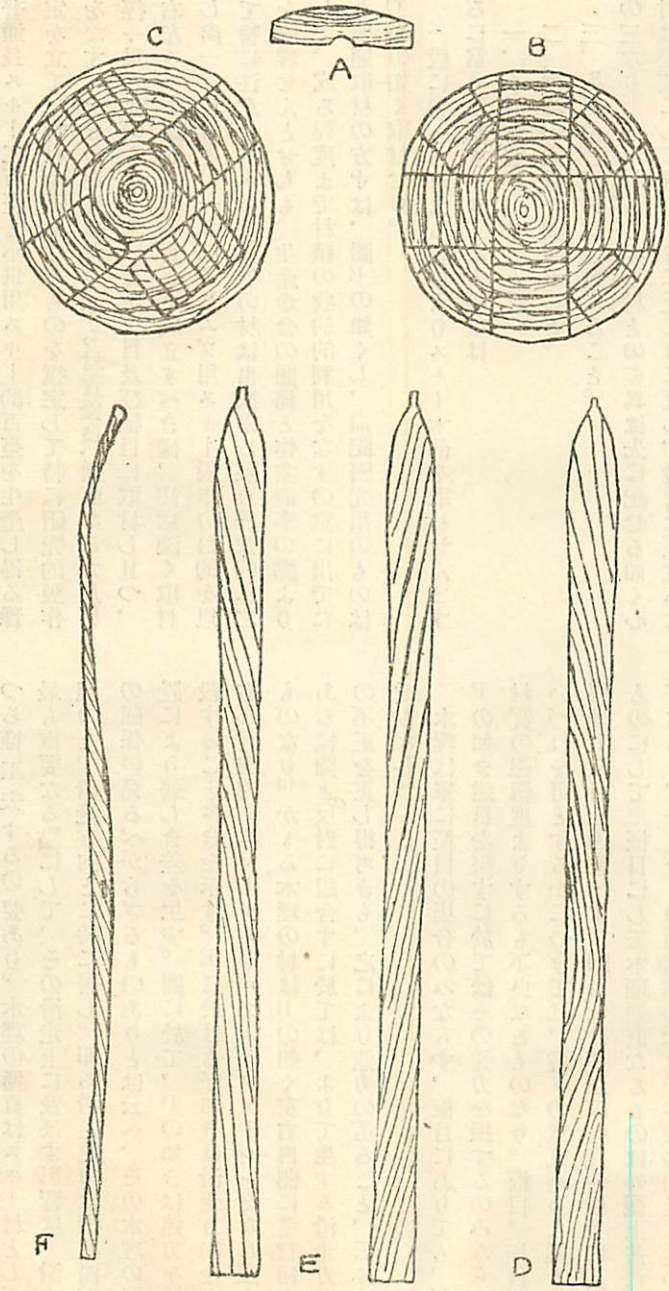
伐採木の撰定につきては林學士林常夫、農學士大宅農夫太郎兩氏、その概要を擧げ、樹幹通直なる經尺内外のものを伐採する樣命ぜられ、一九二三年三月伐採造材を行ひたり。伐採後、運搬設備の關係上、九月末迄山元土場に放置するの止むを得ざりしを以て、材質の毀損を憂ひたるも製材に着手するに及んで、その被害比較的僅少にして、一、二、テッポウムシに犯されたるものありしにすぎず。供試原料木の明細は次表の如し。

直徑＼長さ	七尺材	九尺材	一二尺材	計
九寸	二	一	二	五
一〇	四	二	五	一一
一一	四	四	〇	八
一二	〇	二	四	六
一三	〇	一	一	二
一四	一	一	〇	二
一五	〇	一	〇	一
合計本數	一一	一二	一二	三五
材積	六六石	一一、四	一三、三	三、五

此れによりて見るに實際原料は比較的老齢に傾きたるを知る。然してその幹長は枝下部の長短により造材せられたるものにして、七尺、九尺、一二尺の三種となりたるも、いづれも多少の延寸ありたるを以て、之が製材に當りては後に記すが如く處理せしと雖も、特にスキー用材として造材する場合に於ては一四尺となすか又は七尺となすを可とす。九尺材の如きは六尺四寸内外のスキー一臺分の長さを取るときその殘部の處分上甚だ不利益なり。

五、製材

十月末資材を産地より札幌に輸送し製材に着手せり。資材は概ね材質通直なりしと雖も、三十五本中、七尺材及九尺材中二三捻轉の著しきものあり。此の如きは製材するも到底、良好なるスキー材となすに足らざりしを以て、別途使用の見込を以て製材を見合せたり。然して普通スキー用材原木の長さは七尺を適當とするものなるを以て、一二尺材は之を玉切して二分せり。此れ多少の延寸を加算し精密に木取りをなすに於ては六尺四寸のスキーを得べしとなせしによる。また九尺材もその延寸を加算するに於ては六尺


C
A
B
F
E
D

四寸長のものゝ外に小供用スキーを取材し得る見込を以て二三玉切をなせるものもありたり。尚本資材三一石余より普通長スキー二百臺と小供用スキー約百臺を生産し得る豫定を立て、資材中優良なるものを撰定して特に研究的製作をなすべきものを定めたり、即ち材質優良、通直なる九尺材徑一尺五寸のもの一本は之を板目及び柾目に取材し且つ、右左スキーが同一樹幹材より成立すべき樣、注意深く取材し尚一二尺材中、一本はジャムプ用スキー製作の目的を以て特に注意を拂へり。其他の材は出來得る限り理想的に之を處理せんとせしも、生産歩合の關係と作業能率の點よりして、或る程度まで材積の收約的利用をなすの意に出でたり普通取材の方寸は、圖Bの如くし、前記研究用のものはC面の如く取材せり。

一般に與へられたる幹材よりスキー木部を取材せんとするに當り注意すべき主なる事項は

一、心材を避くべきこと。

二、木理の通直を期すること。

三、板目及び柾目に注意すること。

の三なり。邊材（スプリントホルツ）と心材（ケルンホルツ）との差異は先に記せる如く心材は堅硬にして重く彈性に乏しきに反し、邊材は硬度小なるも輕く且つ彈性に富む。

スキー用材としては邊材の心材に優れること明かなりと云へども、製材歩止の關係上、全然心材を放棄すること難き事情あるを以てその部分を出來得る限り影響尠き面に當つる樣工夫するの要あり。木理の通直はスキー材として最も重要なる點にして、その滑走上に及ぼす影響は、滑走速力と、滑走方向とに特に著し。即ち滑走速力は樹種固有の關係の免るべからざるものありとは云へ、その木理の配置により著しき差を生ず。圖に於て、Dの如きは速力を減殺すること多きを示す。Eに於けるが如きは滑走方向を左右し直線的シュマール・シュプールファーレンをなし難きものなり。かゝる木理の材はBの如く左右内側に進む傾向ある樣圖と反對に組合すに於ては、よりて生ずる滑走方向の不正を正し得可きも、之により速力の劣ること、云ふまでもなし。

木理は單に柾目の場合のみならず、板目にありても、圖Fの如き逆目を來すに於てはその速力を損するのみならず材質の强靱度よりするも不良なるものなり。板目、柾目のいづれを可とするかにつきては、種々の意見ありと雖も、學理上板目を適當とす。即ち此は歪及び强度の兩者に基くものにして、柾目にして木理通直なるものは外觀上甚だ良好なるも、一スキーの兩側部の木質が年齢の相異に從つて異り、爲に歪を生ずること多く、且つ、年輪を形成する春材（フリュヒホルツ）と秋材（シュペートホルツ）との硬度の差により、長き使用の爲め春材

に減減し秋材部の目が立ち、滑降に障害を及ぼすことあり取材上その斷面の木目はA圖の如きものを最良とす。此れ樹幹の外側部を下方になすを可とする木材强弱學の原理に從へるものなり。

尙一對のスキーは同一樹幹より取材せるものを組合すを理想となすべきも、此が實現は材料取扱上非常の手數を要するのみならず、今圖の如く資材の立地殆んど同じき材料に於てはとかく大なる差異なきものと見做し、かゝる手數は一部に限り行ひ他の大部分は之を省略せり。

以上製材により前記資材より得たるスキー原料木部の寸法並びに數量は次表の如し。

分類	長	巾	厚	數量
ジャムブ用	七尺〇寸五	三寸〇四	一寸〇二	四八
研究用	七〇五	三〇四	一〇二	一七
小供用	四〇〇—四〇五	三〇〇	〇〇八	二五八
大人用	六〇〇—六〇四	三〇二	一〇一	三二五
同	六〇四—六〇八	三〇二	一〇一	五二
ゾンマーシー	三〇〇—四〇〇	四〇〇	一〇一	三一

因に製材は七吋帶鋸及び二十四吋丸鋸を用ひたり。

六、加工

かくして得たる原料木は夫々その製作すべきスキーの種類に從ひ、更に小なる帶鋸により巾及び厚さを定め、然る後、加工せり。而して製作の標準となしたるスキーの型は圖Eに示すが如し。

凡そスキー木部の型狀及び色採につきては、從來多種多樣にしてスキー家の好むところ又一定せず。その斷面型の如きは、リリエンフエルデル型の矩形なるものと、テレマーク型の種々なる形狀を有するものとあり。理論上矩型を以て、最强なりとする說あるも、低部に溝(グラーベン)を作る場合に於ては、尙テレマーク型の正當なるべきを認めざるべからず而のみならず、その形の如き、木部重量に密接の關係あるにかゝはらず、好みにより左右さるゝこと甚だ大なるものあり。今回製作せるものは、全く從來の型に依らず、考案せるものにして上部彎曲の細部につきては之が完全に多大の苦心を費したり。之が爲にその製作費は普通矩形の斷面となすに比し約二倍を要するに到れり。一般にその厚さは在來に比し、稍厚き傾向を有せり。此れ斷面に於て中央を高くせると共に歪を避けんとせると、一面に於て、重量の增加を顧みず、衝激に對して强靱ならしめんとの考なりしなり。先端の曲線につきても又獨創的製作を試みたり。在來品があまりに尖鋭なる型を有し、且その彎曲又强きにすぎ却つて折損の機會を多からしむるものあるに鑑み、尙北海道地方の積雪狀況を考慮し、比較的巾廣く取れり。信越地

方の如く新雪積むこと深きこ、積雪の比重大なる地にては、スキーの先端が强く彎曲し且つ尖鋭なるを可とすべきも、北日本スキー地方にありてはかゝる變態的型狀を固執するの要なきを認む。

加工順序は先づ原料木中より木理其他の材質を考慮し、一對となすべきものを擇び、之を標準型により、必要なる長さに比例し製作したる後、彎曲は型に當て、八時間乃至一二時間、大蒸氣鑵中に收容するの方法を取れり。

色採につきては、型よりも尙一層、好みによるものなるを以て、之を如何になすべきやは、居執に迷ひたるも、比較的好惡なき、且製品撰別上木理を識別し得べき白ラック塗となせり。

第一回製作により約一〇〇臺のスキーの加工を了したる際、之が撰別を行ひたるに、木理、型狀、對稱性其他の瑕瑾を注意し嚴正に優良品を求めたる所、僅々十數臺を得るにすぎざりき。最も此が製作につきては、一臺每に指示をなさざりし故、製作技術上充分ならざるものありしは止を得ざるなり。然れども概してその製品は市販のものに比せば、木理の通直なると、仕上の入念なるとに於て比較し得ず、その歪の狀況の如きは、時日を待つに非ざれば斷言し難きも、在來のイタヤ材スキーが、使用後間もなくその最大欠點を示すに比すれば未だ何等かゝる現象を認めず。

ただ概して本製品がその重量他のイタヤ材スキーに比して大なるを見たり。その依りて來る所以は型狀にあるべしと雖も尙資材が稍老齡なりし點にあることも忘るべからず。

ジャンプ用スキー並びにゾンマーシーの如き特種のものにつきてはその製作狀況を後日に讓る。又小供用スキー製作は木取りの關係上之を試みたるにすぎざるを以てその製作には全く意を用ひざりき。特に記すべきは研究用に取材せるものは柾目こ、板目こに製作し且つ、左右スキーを同一幹材のものこなすべく勉めたり。此が成績の如何また後日に待たざるべからず。そのうち各一對は加工をなさず原料木のまゝ、氣乾狀態に放置し次シーズンに於て製作試用せんとす。

元來本資材の乾燥につきては甚だ遺憾の點あり。伐採後一年以上を經過せる後製材加工を行ふの適當なるは言を要せざる所なるも、かくの如きは經費の關係上之を行ふ事難かりしなり。

七、製作費

勿論本製作は研究的に行ひたるものなるを以て、可成的自由に製作を行ひたりしが、その實際經費は比較的小額にして、尙大量生產をなさんか、單價の低廉は期して待つべ

きも現在スキー製作者の情況にては大量生産は品質の粗雑を必然的に伴ふを以て、むしろ、數量を制限し瑕瑾なき製品を得んことに努むべきなり。

八、エゾノダケカンバの試作

フィランド製スキーが主として同國産樺材を使用し、甚だ優良なるに着想し、林常夫氏の創意に基き、同材と材質最も近似的なる北海道産エゾノダケカンバを採り製作を試みたり。

資材の生育地は釧路國足寄郡淕別村國有林淕別事業區第六林班にして立地の關係は傾斜約二五度西向の斜面にして砂質壤土、地味中庸なる針濶混淆林なり。鬱閉度中庸主要材種はエゾマツ、トドマツ、イタヤ、サクラ、ヤチダモ、ヤマハンノキ並びにダケカンバにして、資材の年齢は想定約九十年なり。一九二三年三月上旬伐採せしものにて長さ一二尺末口直徑一・四尺のもの一本のみなり。

本材は造材搬出後、直ちに製材せられたるものなるが、その寸法過大にして、且つ心材部を含むこと多かりしため、之が製作には多大の困難を感じ、八臺分の原料木を得たるも加工に際し心材部を多く有するものは彎曲部に於て破折すること多く、且材質多くの瑕瑾を有せしにより稍可良なる製品三臺を得しに止る。

此の滑走成績は未だ明かならざるも、本材原木はイタヤ材に於けるが如く良好ならざしと製作臺數僅小なる爲、充分の斷定を下し難し。（一九二四・二・二〇稿）

第三回エヴエレスト登攀抄錄

The Times. Weekly Editi n による

（略字 B. C. = Base Samp C. I. = Camp No. H. etc. etc.）

松方三郎譯

一

「私達はエヴエレストから御情けをもらほふ等とは考へない」とマロリーは彼の最後の報告の終りに書いて居る。

二度目の經驗の御陰で今年の探險隊は誠にスラ〳〵と豫定の通りにロングブクの根據地（Base Camp）迄は辿りついたのに、其から先の行程になると、天候の具合で非常な困難と戰はなければならなくなつた。先づ第一に東ロングブク氷河を溯つて漸く第三番目の幕營地を設けると間もなく大吹雪が襲來し、一行は已むなく再びもとのB、C、まで引返さなければならなかつたのみならず、既にその頃、C、Ⅲ、に於て華氏マイナス二十二度――其は一九二二年の探險中での最低温度よりも十度も低い――と云ふ低温を示した。此くしてB、C、に追ひ返された一行は五月の十二日から十六日までを休養に費し、十七日、再び東ロングブク氷河を溯り初めた。初めの豫定から云へば、十七日頃にはもう、頂上に向つて最後の突進をして居る筈であつたのだ。兎に角、非常な努力の結果、二十一日の夕方には北側の鞍部（North Col）に四番目のキャムプを建てた事は建てたのであるが、併しその日の午過ぎから降り出した雪は又も本降りとなつて二十六時間と云ふものは少しもやまなかつた。殊に二十二日から三日にかけての夜の如きは、C Ⅲ、に於て實に氷點下五十六度と云ふ恐るべき温度を示し二十三日から又再び降雪甚しく、遂にc、Ⅳ、に殘つて居た人々も其を放棄して、ノース、コルの急傾斜をC、Ⅲ、まで退却せざるを得なかつた。更にその翌日、再起のため

の休養と、準備とのために、C、Ⅲ、に居た一行は、再びC、Ⅰ、まで退いたのだつた。二度も吹雪と寒氣とに惱まされた一行は、もしや、もうモンスーンが襲つて來たのではあるまいかとさへ心配した。誠にマロリーの云ふ樣に、此の調子では「エヴエルストから御情けをもらほふ等」と云ふ事はとても夢にも考へる事の出來ない相談であつた。肉体的の疲勞と云つても、モンスーンの季節を前にひかへて居ると云ふ點から云つても本當に一日をも爭ふ場合であるのに、二度迄も退却を余儀なくされた一行が、新雪に葬られたエヴエレストの頂きを見上げ乍ら抱いたであらう。不安と焦慮とは察するに餘りある。

二

かゝる事情の下に最後の計畫が企てられた。其は成功しやうと、しまいと何れにしても最後の突貫であつた。そして五月二十七日一行はC、Ⅰ、で相談した結果、初めは、酸素を用ひずに、兎に角二度頂上に向つて見る、もし其でも駄目な時は、その時で又考へ直すと云ふ事になつた。そしてマロリーとブルースが一組、サムマヴエルとノートンとが他の組となつて、オーデルとアーヴインがノース、コルのC、Ⅳ、で後見役をつとめると云ふ事に決つた。かくして一行は三度、東ロングブク氷河を溯つて卅日にC、Ⅲに着き、續いて六月一日に第一隊のマロリー及ブルースはC、Ⅵに至り、更に翌日二五・三〇〇呎の所にC・Ⅴを造つた。併し、此の日の登りで八人の人夫の内四人は既に登行が困難になり、一夜の後、その四人の中で更に前進できるものは一人よりないと云ふ有樣になつたので、已むを得ず此の第一隊の二人はその三日にC、Ⅳに引返した。そして一日遲れに第一隊の後を追つた、ノートン及サムマヴエルの第二隊は入れ違ひにC、Ⅴ、に入つて翌六月四日、二六・七〇〇呎の地點にC、Ⅵ、を建て、五日は早朝からノートン、サムマーヴエルは北側の斜面を登り出した。併し高度が高くなるに從つて登行は非常な困難となつて來た。特に二七五〇〇呎頃の所で急に苦しくなつたとサムマーヴエルは書いて居る。少し之よりも低い所では一歩に三四回の呼吸で樂に登れるのに、此の邊からは、七八回乃至十回も呼吸しなければならなくなつた。そして二八・〇〇〇呎内外の所でサムマーヴエルはノートンと分れて、そこに坐つてしまつた併しノートンの方も實は全く弱りきつて居て、サムマーヴエルが自分の坐つて居る所から眺めて居ると、一時間もかゝつてやつと自分のレベルよりも八呎も登つたかな、と思ふ位であつた。そして遂に二人は頂上に至る希望を棄てゝ、百八十も打つ動悸に惱まされ乍らもと來た道をC、Ⅳ、に下り出した。

三

最後の登攀、そして三度のエヴエレスト探險の内で最も悲しい結果を生んだ其は、マロリーとアーヴィンの二人によつて爲された。六月六日の早朝此の二人は五人の人夫に食料や豫備の酸素筒を擔がせてC、IV、を立つて行つた。翌七日にC、VIに着いた彼等は既に此處までも酸素を用ひて來たのであつたが必要な最少限度に止めて居たのであり天氣都合もよく、誠に前途甚だ有望であると考へた。續く八日も如何にもよい天氣であつて、そんなに寒くはなく、先づ高さ相應の所であつた。併し間もなく雲が出て來て頂上の展望をさへぎつてしまつたけれども、風は極く靜かで時々パラ〳〵と霙や雪降る位のものであつた。丁度此の二人に一日遲れてC、V、に登つて來て居たオーデルが、二人がC、IV、を後にした此の八日の朝C、V、から一人で登り乍ら色々地質學上の調査をして居ると全く急に十二時五十分に一面の霧が霽れてエヴエレストの頂きが眼の前に現はれたのであつた。見ると、尾根の一つの岩の段の下の白い雪の上に一つの黑い影がある。間もなくもう一つの黑い影が現はれて、雪の上を登つて前の黑い點に合した。と見る内に最初の黑點は、その岩にとつゞいて間もなくその頂きに出ると、彼の黑點もそれに從つて行くのが見えた併し其はほんの僅かの間の事であつて、直ぐに又も雲の内に見えなくなつてしまつたのである。此のオーデルが二人の登つて行くのを見たと云ふ所は頂上のピラミットの麓から少し下の所であつて、マロリーの豫定から云へば、もうよほど前に到達せられて居るべき地點であつたのであるから、何か出發前かその後に思ひ掛けぬ故障に出會つたのであらうと考へられて居る。併し其にしても、オーデルの考へから云へば最後の登りは望遠鏡や雙眼鏡で精しく研究した所、決して登る事は困難とは思はれないからして、遲くとも夕方の四時頃には頂上に着いて居なければならないと云ふのである。

何れにしてもオーデルが十二時五十分に二人の登つて行くのを見た時以來遂に二人の姿は見出されなかつたのである。彼は途々調査をし乍ら、C、VI、まで登り、若しや二人が天候の不良のために引返して來はしまいか、そしてその時に方向を間違へない樣にと少しばかり頂上の方へと登つて見た。霙にたゝかれ乍ら口笛をふいたり、大聲に呼んだりして。併し万一彼等が歸りつゝあつたとしても、とても、聲のとゞく氣遣ひはあるまいと、まもなく又もとの途を辿つてC、IV、へ下つた。そして夜遲くまで何か彼等が歸つて來たと云ふ信號があり相な物であると空しく見張つて居たのである。併し何の信號もないのみか、其の翌日も

彼等は下りて來なかつた。ノース・コルでは多分前夜の歸着が遲かつた爲めであらうと考へて居たけれども、いくら雙眼鏡で見ても其らしい姿をC、VI、の邊りに見出す事が出來なかつたので、その日(九日)の午後オーデルは再びC、V、に向つた。そして翌日の午後酸素を用ひ乍らC、VI、に辿りついて見たけれども、其はただ彼自身が二日前に、そしてマロリーとアーヴィンがその出發の朝殘して行つたその儘の天幕を見出すに過ぎなかつた。「天幕を後にして」とオーデルは書いてゐる「私は少しばかり登つて見た、そして彼等の登路の方向に斜面の上を何か手掛でもあるまいかと手を盡してさがして見た。併しこんな大きな山の面の上では何の望みがあらう。」その内日は暮れかゝつて來るので彼は天幕をとぢて遂に空しくノース、コルをさして下るより仕方がなかつた。時々岩陰に猛烈な恐ろしくつめたい西風をよけて、身を温めては凍傷を防ぎ乍ら、彼がC、IV、に歸つて來たのは日が暮れてからであつた。そしてその翌十一日彼等はC、IV、を捨てゝ東ロングブク氷河へ下つたのである。

四

かゝる山の上で、その頃の狀態の下では何人も二晩と天幕なしに生きて行く事は決して出來ない。其にしてもマロリーとアーヴィンとは何故C、VI、まで歸る事が出來なかつたのであらう。ノートンは天候とか酸素とか云ふものとは關係のない何か他の出來事が起つたのではあるまいかと云つて居る。又オーデルは彼等二人は明るい内にC、VI、に辿りつく事が出來なかつたもので岩陰にでも休む内に、一日の疲勞から思はず眠つてしまひ次いで、山上の恐ろしい寒氣のための苦しみのない死が其に續いたのではあるまいかと云つて居る。

然らばエヴエレストの頂上は彼等二人に依つて登られたであらうか。併し之は、此の二人が永久にエヴエレストの頂近く見失はれた以上、解く事の出來ない謎である。オーデルは色々の事情から推して、兎に角二人は頂上に登つた事は登つたに相違あるまいと云つて居るけれども、勿論一つの推察にすぎない。併し少くとも彼等は二八・二二七呎と云ふ人間の登つた高度のレコードを造つた事は爭はれない事實である。

五

六月の十五日、一行は重い心を抱き乍ら、ロングブクのBase Camp を後にした。

何時か再びチベットの高原を横切つて再びこのロングブクの谷を訪れる人があつたならば、其人は當年の Base

Camp のあつた所の上に立つて居る圓錐形の推石の山の一つに、三度のエヴエレストの探險のために一命を獻げた人々の名を記念するために建てられた一つの記念碑を見出すであらう。

附　一、マロリー及アーヴインの事

凡そエヴエレストの探險に興味を持つて來た位の人は何人もマロリーが之迄如何なる地位を占めて來たかを知つて居るであらう。彼は一九二一年の第一回探險に於て、ノースコルよりする登路を發見し、一九二二年の第二回目に於ては酸素を用ひずに、二六・八〇〇呎と云ふレコードをつくつた一人である。今年も彼は第一に酸素を用ひて登るべき一人と決められて居たのであるけれども、其は天候の不良のために果されずに於り、當初の計畫とは異つた計畫によつて酸素なしで六月二日に二五・三〇〇呎のC、V、まで登り、次いで僅に三日の後に酸素を用ひつゝ最期の登高へと志したのであつた。身体の均合その他の肉体的條件から云つても、山にかけての――その岩、雪、氷についての――經驗から云つても、將又その人となりから云つても、誠に理想的な登山家と云はれた彼は、エボエレストの探險隊にとつては是非なくてはならぬ大事な一人であつた。「一人の人としては彼は私達全てと本當に親しい友達であつた。そして彼の洗練された柔和な精神は、行動の際に彼の發揮した所の不斷の、猛烈な精力と不思議な對照をなして居た」とノートンは書いて居る。彼は性質から云へば内省的な哲學的傾向をもつて居たと云はれて居る。彼は今年三十九才であつた。

アーヴインに就ては我々は全く之迄聞く所がなかつた。彼は今年初めて一行の内に加はつた一人であつた。彼は現にオックスフォードに籍を有し、二學明の休暇の許可を得て此の行に加つたのである。年から云へば一行の平均年齢より十二も若い二十二才の青年であつたけれども、スピツツベルゲに於ける一九二三年の探險の一員として修めた成功と、彼の偉大なる体力が彼を此のエヴエレスト探險の一行に加へる可き動因となつたのである。又事實彼はその体力の點に於て驚くべき成績を表した。「肉体的には彼は私達の内で一番强かつた」とノートンも書いて居る。又彼は常に快活で謙遜であつて皆から愛されて居たのみならず、機械的才能と工夫に富んで居たゝめに非常に調法がられて、今度の探險を助けるために少からぬ働きをしたのであつた又彼は冬季スウイスに於けるスキー、ランナーとして知られ、又オックスフォードのボート選手として名をうたはれて居たのであつた。一九二二及一九二三年の兩度のケンブ

リッチとの競漕に加はり、若し今年彼がエヴエレストに向はなかつたならば、勿論その一人として、そして多分その首將としてオールを握る筈であつたのである。（さぶらう）

附　二、高さの記錄

二九一四一呎又は二九〇〇二呎　エヴエレストの頂上

二六・九八五呎　マロリー、ノートン、サムマヴエル（酸素を用ひず、一九二二年五月二十一日）

二七・三〇〇呎　フィンチ、ブルース（酸素を用ひて、一九二二年五月二十七日）

二八・一二八呎　ノートン、ザムヴマエル（酸素を用ひず、一九二四年六月五日）

二八・二二七呎　マロリー、アヴーイン（酸素を用ひて、一九二四年六月八日）

山岳

第十八年第一號が出た。巻頭には例の船田三郎君が『冬から春への槍ケ岳』と題する『スキーアルピンストとしての此の方面の開拓者であつた故板倉勝宣氏の跡を蹤ふて、此の地方のスキー登山案内記を認め』てゐる。板さんも浮ばれまい。榎谷徹藏氏か擦をはいて『冬の靈仙山』登つた記事がある。竹内亮氏は『球磨川より綠川へ』を書かれてゐる。氏の熱心さにはいつもながら感嘆の他はない。『山岳』にもウインター・クライミングの記事が多く見える樣になつた。これからは質の撰擇である。（かの生）

◆豫約募集◆

慶應山岳部創立十周年記念のために刊行

登高行

私等のグループが、この集りをつくつてから、こゝに十年を閲しました。このワンデケードを區切るために、そしてまたこゝに於て、私等のグループのこれまでの貧しい歩みの跡を顧みるために、この小さき紀念的な刊行を敢へて致した次第です。つまらぬもの乍ら、諸君等しく山への途を歩まるゝ方々の御一讀下さるゝことを望みます。

一、穂高の登路と岩登りに就て（研究）　三田幸夫
一、穂高岳スキー登山（登山研究記錄）
　スキー登路と北穂高　大島亮吉
　奥穂高（澗澤登路）　早川種三
　前穂高（岳川登路）　青木勝
　西穂高より奥穂高へ　波多野正信
一、北海道の夏の山（紀行斷片、並びに感想）　大島亮吉
一、グリッセディンクに就て（研究）　三田幸夫
一、飯豊の五月（登山研究記錄）　田中三晴
一、慶應山岳會についての感想と回顧　槇有恒
一、リーダーシップに關して（研究）　早川種三
一、春と燕と大天井（紀行）　大賀道昇
一、明神岳（登山記錄）　中村邦之助
一、三月の磐梯と西吾妻（紀行）　漆山巳年夫
一、小槍（登攀記錄）　中村邦之助
一、屏風岩（登攀記錄）　本郷常幸
一、前穂高北屋根（登攀記錄）　槇弘
　　佐藤久一郎
　　青木勝
　　大賀道昇

内田節二
橋本靜一
二木末雄
中條常七
佐藤文二
山縣正章
先輩部員

一、冬の藏王（紀行）　西川不二雄
一、我等の十年史　大島亮吉
一、登山小屋の設計と構造（研究）　豊邊國臣
一、密林　佐藤久一郎
一、譯詩、譯章、挿畫、
ジャヴエル・オスカブ・エリツヒ・マイエル・ゲイヤール

一、ある登山小屋の備付記錄帳から

体裁　菊版大型　堅表紙　全部ポイント活字組　紙質上等
着色寫眞版十五葉　全頁約三百五十頁

価格　豫定實價貳圓五拾錢　送料十二錢　實價は印刷出來の上ならでは確定せざれば概算の上の豫定額を申し受く。

刊行期日　十一月初旬

豫約申込期日　九月末日迄

豫約希望のお方は右の豫定實價送料共に添へ、當部編輯委員まで申込み下さい。

東京市芝區三田二丁目　慶應義塾体育會山岳部

編輯委員　大島亮吉
三田幸夫
青木勝

獨逸スキー活動寫眞公開

客年秋本會の手により北海道に公開しました獨逸映畫「スキーの驚異」の第二部は輸入後東京帝大にて試寫せられた他、まだ一般に公開せられないものでありますが、所藏者の特別の好意により今秋本會の手にて北海道に公開することを得る運びになりました。第二部は既に御存知の第一部に比して更に大卷でありまして、內容またドラマチツクでありますから、スキー家、山岳愛好者の多大の期待を滿して餘りあることゝ信じます。

札幌　山とスキーの會

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

スキー・登山用具・其他運動
具類は是非當店へ御下命を

小樽市稻穂町大通

梅屋運動具店

電話九八六番　振替小樽七〇番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たるる方が一人でも多くお讀み下さることをお願いたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C.G.S.係によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十三年九月三十日印刷
大正十三年十月一日發行
（毎月一回一日發行）

編輯兼印刷兼發行者　佐々木政吉

印刷所　札幌市北一條西二丁目　札幌印刷株式會社

發行所　札幌市北六條西六丁目　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 42. Oktobro.1924. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二七日第三種郵便物認可
大正十三年九月三十日印刷納本
大正十三年十月一日發行

美滿津ノ
ウ井ンター・スポーツ
各種用具

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前

山とスキー 第四十二號

定價金參拾錢